巻頭言

異分野との出会い

吉﨑　真司

私にとっての異分野・異文化交流は，アラビア半島の UAE という小国から始まりました．小さな環境コンサルを休職して ,JICA の技術協力専門家として赴任した先です．私は乾燥地における防風・防砂林研究の専門家として２年間従事したのですが，海外経験は初めてであり，もちろん沙漠に来るのも初めてでした．そこで接したのが農業の専門家や漁業の専門家です．私の専門分野は林学なので，農学や水産学は異分野です．林学と農学は共通点が多くありますが，林学と水産学の共通点は，当時はほとんどありませんでした．しかし現地で見た光景は衝撃でした．海辺に造った養殖場からの排水を利用してマングローブの森を育て，その森に集まってくる魚を育てて水産資源を豊かにする技術の開発です．まさに林学と水産学の融合ともいえる技術です．これと同じではありませんが，最近では「森は海の恋人」と言って，豊かな海は川の上流から流れ出てくる豊富な栄養分を含む水にあるとの考えから，漁師さんが山に植林をして森づくりをする運動も盛んになりつつあります．さて，次の出会いは，私がこの横浜キャンパスへ来た 1999 年の４月，環境情報学部が誕生して３年目のことでした．理論物理学の小沼学部長，電磁波の高田先生，建築環境学の宿谷先生，法学の倉沢先生，社会学の富永先生，経済学の西嶋先生，政治学の小野先生，心理学の川村先生等々，私にとってそこはまさに異分野・異文化の世界，今の言葉で言えば多様性豊かな異次元の世界に迷い込んでしまったと思えるほどの衝撃を受けました．ある日の教授会で，環境情報学部の紀要について次のような議論が行われました．「理系の研究者はどうして査読なんてことをやろうとするんですか．その研究者が自分の研究成果を世に出したいと思って投稿してきたものを，世に出す前に抹殺するんですか．ダメな論文は誰も引用しなくなるし，参考にもしなくなるものです．」，「いやいや私たちにとってはデータの再現性が，客観性が，信頼性が大事なんです．だから，それらを世に出す前に確認する必要があるんです．」．宮坂先生や青山先生の，「教員は ,Mission Passion Action が大事！」という言葉も姿勢も，先生方の強烈な個性とともに刺激的な出会いでした．藤井先生と奥平先生とは，環境情報学部を分けるときに多くの議論をさせていただきました .1 号館の学部長室でのことです．「私の分野では環境アセスメントという言葉があるんですよ．」，「それいいね ,ICT アセスメントか，それでいこうよ．」と言って新しい科目が生まれました．

厳研究室や諏訪研究室とは中国の沙漠化地域において，情報技術を使った環境把握の方法についてともに研究に取り組ませていただきました．これもまた情報系の先生方との出会いがなければできなかった仕事です．最近では，小池研究室や史研究室とのコラボレーションによって，岩手県宮古市の「かわい木の博物館」の受託研究で，ロボットの組立てやドローンによる森林環境教育などのイベントを実現することができました．

考えてみれば横浜キャンパスは異分野交流の宝庫です．先生方の交流が深まれば，色々な共同研究や共同プロジェクトが生まれ，結果として学生が大いなる刺激を受けて成長することができます．例えば SDGs で抽出されている 17 のゴールは，異分野（色々な研究室）の出会いと協力によってのみたどり着けるのではないかと思います．

このメディアセンタージャーナルが，そんな異分野交流のための出会いの場となって発展していくことを祈ります．

YOSHIZAKI Shinji
東京都市大学環境学部環境創生学科教授